【年次報告】

# 一般的観点と出来事論―ともに考える、ひとりで考える―DG-Lab の８年間

伊藤　幸生

この会報『hyphen』2023 年度版での、「年次報告」は、やや旧聞に属する事とはなりますが、昨年 2022 年度に関するものになります。2022 年、DG-Lab は活動８年目を迎えました。今、この DG-Lab の特徴をひとつ挙げるとすれば、それは、大学院生や研究職の人々と学外の人々とが、ほぼ８：２の比率で入り混じった読書会、そして研究会であるというものです。大学外の組織ではありますが、大学に関係する二、三十代の参加者が多く、その瑞々しい知的欲求と一定以上の知的水準に支えられているという面が強い、広く開かれた集まりです。そのような中、今年の「年次報告」の筆者である伊藤は、大学や学会などとはかかわりがなく、そうした者として、在野でドゥルーズを読む多くの人たちに向けても、この年次報告を書いてみたいと思います。

社会学者の酒井隆史氏が、ドゥルーズについて次のように述べたことがあります。「「器官なき身体」や「ピンクパンサーになれ」とかグッとくるフレーズがたくさんあるけど、それ以上理解しようとすると、知的な含意が無茶苦茶広いし深いじゃない。」（『ドゥルーズ没後 10 年　入門のために』、71 頁）。

1965 年生まれの酒井氏にとって、1983 年の『構造と力』に始まる浅田彰氏によるドゥルーズ紹介がおそらく初めてのドゥルーズ体験だったのではないかと思われます。浅田氏による解説は、速度や強度、スキゾ分析、また、資本主義分析などの明快なドゥルーズ像を描き出したものでした。ところがその後、1986 年の『アンチ・オイディプス』をはじめとして主著が翻訳されていくなかで、思われていたよりもはるかに文章は込み入り、内容は西洋の知的伝統に深く根ざし、また、参照される分野は途方もないということが明らかになっていきました。

1980～90 年代に限らず、ドゥルーズを読む多くの人々にとって、酒井氏の実感は痛切なものとして感じられるものではないでしょうか。私たちはたとえば『襞』にも『シネマ』にも、酒井氏の言うような、「グッとくるフレーズ」をいくつも見出すことができます。しかし、ひとりで読んでいては相当な時間をかけても何が述べられているのか見えてこない箇所があるのも避けることのできない事実ではないでしょうか。

國分功一郎氏は、その博士論文の指導教員であった森山工氏に「國分さんはスピノザをひとりで読んでいる」と何度も指摘され、このことは結局乗り越えられなかったと述べます。そして、「本書の結論はいつの間にかこの指摘への応答になっていた。だが、自分ではなおも「ひとりで読んでいる」とはどういうことなのか、また、「誰かと一緒に考える」とはどういうことなのかわかっていない。私はおそらくそこに到達しなければならない。」と書きます（『スピノザの方法』、あとがき、358 頁）。

この國分氏の逡巡と決意からは、大学という場所がどういうものかがうかがわれます。「ともに考える」ということには、過去や同時代の書物の著者との対話という意味があるとしても、なによりも具体的な生きた人同士の日常的なかかわりの有無こそが問題になると思われます。大学とは、たとえば、デリダの使った avec という前置詞ひとつに、１年かけてその解釈を話し合い続けるというような具体的な対話に支えられながら考えることが、日常的に保証されるような場所です（デリダ読解の挿話については、芦田宏直、『シラバス論　大学の時代と時間、あるいは〈知識〉の死と再生について』、344 頁をご参照ください）。

森山氏の指摘と國分氏の問いとをもしアカデミズム的なものとするならば、いわば在野的なものとして、「ひとりで読む」ということを徹底したかのような人をひとり挙げてみたいと思います。その人は故吉本隆明です。吉本については、「在野の知の巨人」などというキャッチフレーズがメディアでよく使われていましたが、誰もがつい口にしてしまいそうなこの言葉には一度立ち止まってみる必要があると思われます。その、「在野の」という部分に込められた人々の情念の意味はやはり重いでしょう。在野、大学の外、ということは組織だった知的なつながりの乏しい場所だということです。働き、子を産み育て……などの生活に知的な交流などというものは、日常的には期待できないものです。

吉本が広く読まれたのは、彼が、大学という知的組織のない場所で、まるで「ひとりで読み、考え、書いている」ようだったか

らではないかと思われます。「マチウ書試論」、『源実朝』、『悲劇の解読』などのもつ迫力はまさにひとりで読み、考え、書いているかのような孤独という印象を残します。「吉本さんには他者がいないんですよ」と、ある批評家が語ったことがありました。実際の吉本の生活がどうだったのかは別のこととして、吉本が書いたものから逆算すると、「ひとりで読み、考えている、他者がいない」という表現がなにかを言い当てていると思われるのです。

ここで少し話をドゥルーズの思想につなげてみます。他者が欠けた世界にドゥルーズが肯定的なものを見出していたことは広く知られていることと思います。そうした思想の中核的論文である「ミシェル・トゥルニエと他者なき世界」に、「他者は類似と隣接の潤滑剤（douceur なめらかさ、なめらかにするもの）である。」という一節があります（※）。この「類似」、「隣接」という言葉はヒュームに由来するものと思われます。想像という働きが諸観念を相互に結びつける際に、原理（連合原理）として想像にもたらされるもののことですが、ここでは「潤滑剤」という言葉に着目してみます。（※國分功一郎氏は、この一節につき、ドゥルーズは、他者こそが連合原理の発生源だとしていると述べます。『ドゥルーズの哲学原理』、58 頁。）

具体的に考えると、「潤滑剤」という言葉からは、他者というものの現前や存在が量的なものとして、度合としてあるものと読めます。まったく他者が欠ける世界、ほとんど欠ける世界など、様々な度合を考えることができます。「他者」とは、知覚的な場の総体を機能させる構造とされ、可能的なものの構造とも言いかえられます。他者は可能な世界を表現する。私が知覚する各対象や私が思考する各観念の周囲に、ありうる世界という余白や背景を組織します。ところが、具体的な他者なき無人島で知覚的な場の構造の崩壊にみまわれたロビンソンは、「意識が事物に内在する燐光になる」などの新たな、強烈な世界と出会うことになるのでした。

このトゥルニエ論は、『意味の論理学』に「付録」として収録されたものですが、本文と付録とがまさに相手の中で響き合うかのように、『意味の論理学』の本文で、他者の存在の度合がきわめて低い人物、あたかもひとりで世界を知覚し、ひとりで考えたかのような人物として、ジョー・ブスケが書かれていたのではないでしょうか。自らの傷について、ブスケはひとりで考え抜いた。傷という偶発事 accident を前にして、「不幸」という事態の中で、他者が自ずと消えたのではないでしょうか。ごく日常的に考えて、不幸な偶発事はひとをひとりで考えさせます。ひとは時に不幸について突飛な解釈や意味づけをしてしまいます。では、ブスケはどうだったのでしょうか。潤滑剤としての他者があたかも消えたかのようになった、言いかえると、ありうる事実や観念の結合というものを他者がもはや表現しえないかのような世界が訪れた。それゆえにブスケは、傷という事実を受けて、ドゥルーズをして「これ以上の言葉はない」と書かずにはいられないようにした、途方もない言葉を言うことができた。他者とともに考えていてはとても思いつかないような事柄に思い至ったのでした。

他者とともに考える、ということは時にありふれた考えにいきつきます。このことにつき、一度ドゥルーズはその肯定的な側面を徹底して考えました。『経験論と主体性』において、特定の情念や利害などに囚われた現働的なあり方を逃れさせるものとしてドゥルーズが肯定的に取り上げたヒュームの「一般的観点」は、『哲学とは何か』におけるオピニオンと同様に一般論の世界です。トゥルニエ論では、「連合原理」や「可能的なものの様相」などの、『経験論と主体性』で問題にされていた事柄が、他者との関係で述べられ、明示されてはいませんが、同書が他者論として位置付けられたうえで、他者が欠ける世界が肯定されたのでした。

『経験論と主体性』と『意味の論理学』とをひとつの問題が貫いています。それは、「事情」や「偶発事」のもと、特定の現働的な状態に閉じ込められた主体がどう生きるか、というものです。『経験論と主体性』では、特定の現働的状態からの脱出を可能にする想像力の働きを核として、ヒュームの「一般規則」や「一般的観点」に依りながら、問題が展開されました（なお、同書でも、宗教論で、「不幸」が他者のいない世界に通じるかのような記述が見られます）。この「現働的状態をどう生きるか」という問題が『意味の論理学』へと引き継がれ、出来事論として結実したのでした。「ヒュームからブスケへ」というドゥルーズの思想の転換があったと読むことができます。一般的観点から出来事論へ。

ブスケは広い交友関係のある人であったと言われ、そうした実際の生活が傷について思いめぐらせることに寄与したとももちろん考えられます。しかしブスケの言葉は、ひとりで考え抜いた人のものであるというほかないというふうに感じられ、迫ってくるものです。ひとりで読む、考えるということには何らかの大きな意味があることはまちがいなさそうですが、吉本隆明にしても、ジョー・ブスケにしても、ひとりでにそうあらざるをえなかった、ということが真実でしょう。そして Lab としては、事情が許す限り、ともに読むという欲求や願いに従っていきたいと思います。

昨年の DG-Lab の読書会の年間計画は、『アンチ・オイディプス』でした。『アンチ・オイディプス』のような、まさしく酒井氏のいう「グッとくるフレーズがたくさんあるけど、それ以上理解しようとすると知的な含意が無茶苦茶広いし深い」本をともに読む機会があったということから、そして DG-Lab の 8 年間の活動の累積から得られた体感にもとづいて思い至った幾つかの言葉について、本稿では書いてみました。

2022 年活動記録

第 42 回　DG-Lab 研究会

【日時】2022 年 1 月 22 日（土）14:00-17:30

【使用アプリ】Zoom

【読書会】ジル・ドゥルーズ＋フェリックス・ガタリ『アンチ・オイディプス』第 1 章（進行：内藤慧）

第 43 回　DG-Lab 研究会

【日時】2022 年 3 月 5 日（土）14:00-17:30

【使用アプリ】Zoom

【読書会】ジル・ドゥルーズ＋フェリックス・ガタリ『アンチ・オイディプス』第 1 章、第 5 節、第 6 節（進行：内藤慧）

【研究発表】F・アツミ（Art-Phil）「ドゥルーズ・ガタリの歴史とパブリック・ヒストリーへの問い：出来事、アジャンスマン、生成の視点から

第 44 回　DG-Lab 研究会

【日時】2022 年 5 月 28 日（土）14:00-18:30

【使用アプリ】Zoom

【読書会】ジル・ドゥルーズ＋フェリックス・ガタリ『アンチ・オイディプス』第 2 章、第 3 節～第 5 節（進行：平田公威）

【研究発表】得能想平「問題としての理念――ドゥルーズのカント解釈を参考にして」

第 45 回　DG-Lab 研究会

【日時】2022 年 8 月 27 日（土）14:00-17:30

【使用アプリ】Zoom

【読書会】ジル・ドゥルーズ＋フェリックス・ガタリ『アンチ・オイディプス』第 3 章、第 1 節～第 7 節（進行：西川耕平）

第 46 回　DG-Lab 研究会

【日時】2022 年 9 月 28 日（土）14:00-17:30

【使用アプリ】Zoom

【読書会】フェリックス・ガタリ＋フェリックス・ガタリ『アンチ・オイディプス』第 3 章、第 8 節～第 11 節（進行：西川耕平）

【研究発表】尾谷奎輔「ガタリのダイアグラム的欲動」

第 47 回　DG-Lab 研究会

【日時】2022 年 11 月 19 日（土）14:00-17:30

【使用アプリ】Zoom

【読書会】ジル・ドゥルーズ++フェリックス・ガタリ『アンチ・オイディプス』第 4 章、第 1 節～第 3 節（進行：有馬景一郎）

【研究発表】内藤慧「ドゥルーズの「管理社会」論」